第２回桐生市総合戦略推進委員会ワーキンググループ　議事録

○日　　時　　令和３年１２月２３日（木）午後１時３０分～午後３時３０分
○場　　所　　ふふふ
○出 席 者　　１５名

【委員】	社会福祉法人桐生市社会福祉協議会　常務理事	八町　敏明
	一般社団法人きりゅう市民活動推進ネットワーク　理事長	近藤　圭子
	ＮＰＯ法人キッズバレイ　代表理事	星野　麻実
	公益社団法人桐生青年会議所　副理事長	深澤　佑太
	桐生市総合計画審議会　副会長職経験者	新居　理恵
	移住者	和崎　拓人
	移住者	川堀　奈知
	移住者	山本　祐司
	地域おこし協力隊	小林　由香
	公募市民	山口　典利
	公募市民	清水　哲
【桐生市】	桐生市共創企画部企画課長	西條　敦史
	桐生市共創企画部企画課企画戦略担当係長	金子　貴征
	桐生市共創企画部企画課企画戦略担当	伊藤　美和子
○報道関係	桐生タイムス	１名
	読売新聞	１名

○傍聴者　　１８名

○会議内容

１　開　会　［ 開始：午後１時３０分 ］

・事務局から、過半数の委員の出席により会議が成立することを報告。

２　挨　拶

・新居委員長から挨拶。

３　議　題

（１）人口減少対策のあり方について

・前回欠席であった委員から意見をいただく。

委員	前回欠席だったので、事務局の方に事前にお話を聞いてもらって、意見要旨にも私の意見を反映してもらっている。 3 点ほど述べさせてもらっていて、仕事のところで、就労支援などをしている中で、精神疾患であるとか、家庭の事情で長い間離職期間があったりとか、すぐにパートの募集が見つかっても、すぐにチャレンジするのが難しかったり自信が無かったり、せっかく勤めても続かなかったりする話を聞くので、段階的に働け

	るような仕組みがあると、働き方としても多様であり、待ち望んでいる方もいるのではないか。 2 点目が教育だが、教育はすごく子どもたちにとっても大切なものであり、かつ、まちの魅力にもなるキラーコンテンツだと思っている。ほかの地方都市を見ても、教育が突き抜けている、とがっているところは、そこを目掛けてたくさんの取材が入ったり、たくさんの視察が入ったり、その教育を受けさせたいと移住する方もいるので、私立だけでなく、公立学校が特色を出して、桐生の地域の公立はこういう特色があって魅力的だねというのを打ち出せれば、というのが 2 点目である。 3 点目が、関係人口のところで、桐生は用がなければ来ないけれども、誘われて行ってみたらすごく面白いまちだ、というのは本当によく聞く話なので、足を運んでいただいて、その後につながれる関係が深まっていくような仕組み・工夫が関係各所の連携の下で作っていけるといいのではないかということを述べさせてもらった。

・資料１に基づき事務局から説明。
・意見、質疑応答は以下のとおり。

委員長	前回、一人ずつ意見を伺って要約したものが資料１となる。ワーキンググループの運営自体に関する意見と本来である事業に関する意見として 8 つの分野に分けているので、本日はこの意見を中心に、分野ごとに更に深堀りしていく。 本日は、分野の１から８までの全てをざっと深堀していこうと考えたが、その中で、できれば分野ごとに１つ２つに絞って先に進んでいって、最後にその中から一点突破の、分野を超えて１つを選びたいと思う。選ぶといっても、市長が言ったとおり、予算を付けて、すぐにやる、効果があるもの、費用対効果があるものという考え方だと思うが、私たちが挙げたものに対して行政側も真剣に施策として実現しようという風に考えてもらっていると私は考えているので、そういった考えで一転突破の施策を選ぶ。ほかの意見は要らないかというと、そういうことではなくて、中長期的なもの、お金をかけずにできること、色々な意見が出てくると思うので、これらを含めてまるっと上に持っていきたいと私は考えているので、これを踏まえて皆さんにはお話ししてもらいたい。 今回、次回と、もしかして、もう１回の３回くらいで深堀りしていきたいと考えている。今回はできるところまでやっていきたいと思っている。
委員	分野に分けることは良いことだと思う、でないとまとまっていかないと思う。ただ短期・中期・長期で時間を分けないとすぐに実行できるかできないか、費用対効果があるかどうかということがあると思う。分野の中でも短期・中期・長期と分けていかないと即効性がある意見が出てこないと思う。 過疎化対策なので、人口は年間 1,500 人程度減っている。それに対してどうするかとすると、このワーキンググループは来年 3 月までで、やることが決まって、事業を実行する段階は更に１年後である。その間に多くの人口が減っている状況になってしまう。それでは過疎対策のワーキンググループとして効力・効果

	が少ないと思っているので、短期的なところも含めて、重点的なところを考えていった方がいいのかなと思う。
委員長	短期的なところは、予算が関係ないところであっても一回総合戦略推進委員会に上げなければならないのか。でもそういう話はしていっても大丈夫か。
事務局 （企画課長）	話し合いの中で、柔軟に考えていく。
委員長	そういった観点を含めての話し合いをさせてもらいたいと思う。 まずワーキンググループの運営について、前回を終えて、更にお気づきの点があったらご発言をお願いしたい。
委員	こんな形でやれればいいと思う。
委員	ホワイトボードがあればいいと思う。進行形の議題が常に見えている状態が結構会議の時に大事なので。
事務局 （企画課長）	ホワイトボードについては検討する。 今後どこで運営していくかも問題になってくる。色々な所で会議を行うとホワイトボードを担いでいくわけにもいかない。その辺の絡みも併せて考えてもらえればと思う。
委員	やりながら、気づいたところがあれば、変更していければいいと思う。
委員長	柔軟に対応してもらえると思うので、何か気づいたところがあれば言ってもらえればと思う。 運営に関することは、こんな感じでよろしいか。 次が人口減少対策に関する意見となるが、まずはしごとに関する意見について、ご意見があったらご発言をお願いしたい。できれば具体的に何をしたらいいか、具体的にどう動いたら上手くいくか、未来志向の明るい感じのご意見があったら幸いである。 まず、上から、「母親が子育てをしながらも仕事を続けられるような桐生ならではの取り組みがあればいい」という意見があるが、具体的にどういうことをしたら、こういうことが可能になるのか、具体的な施策のイメージがあるか、いかがか。
委員	委員がやっていることが正しくそのことを仕事として実践していると思うが、もっと多くの人が利用してもらえればいいと思う。
委員	女性が子育てしながら仕事も続けている気がして、仕事を続けていない人の事情が、スタッフを募集する時でも友たち伝いで人を探すと、仕事をあまりする気がない、今すぐに働く必要がないという回答が多い。キャリアアップとか収入を

	上げるとか、働く環境を良くして家庭の経済力を上げていくという取組であれば色々とあるのではないか。アルバイトをしたいと言った時に、支援や応援があったり。 　保育園も入れるし、特色的なのだけど、特色的でなくなってしまっている。在宅で働きたい方への支援もやっていて、希望もあったりするのだが、何かしら事情を抱えていなければ、子どもを保育園に預けて働くという環境があるのかなと思っている。何らかの事情が、働かなくても済む人は、家のことをやることが楽しいとかであればいいと思うが、働くなと言われている場合であったり、お前は家のことだけやれ、と言われている場合であったり、あとは、不登校やお子さんの通院や通わなくていけない特別な事情、親の介護があるとか、子育て以外の要因が発生して時間で区切られた働き方が難しくなった時に、毎日 10 時に出勤して 16 時までとか、働く時間を約束することが難しい時に、リスク、障壁が出てくるのかなと思う。
委員	行政にこういうことをお手伝いしてくれたら、もっと働きやすくなるし、こういうのは、ほかにやっていないけど、思い切って考えてしまったらいいのではないか、というものはないか。
委員	恵まれた環境にいると、あんまりそれは考えない。一番困っている人というのは、子どもが急に病気になった時とか、こういう時の対応が、自分が行ければいいけど、結局行かなければならない時に、普段、毎日困っている人はあまりいないと思うが、いざという時でも助かるというものが何かあるとホッとできると思う。
委員長	色々な事情があると思うが、自分が外に出なくても、子どもが小さいし、何とかやっていけるし、今は働かなくていいと思っている人は、働きに出た場合、ちょっと大変だなという思いがもしかしてそこにあるのかもしれない。 　働いているママたちが何かあった時に安心して、手を差し伸べてもらったり、何か上手く利用できたりする制度が充実していると、出てみようかなと、ハードルが低くなるかなと、そういう部分の制度があるといい。確か桐生はファミリー・サポート・センターがあると思うが。
委員	ファミリー・サポート・センターが今日の今日で対応ができるかどうか。登録しているとできるという話も聞いたが、そこの部分が、皆さんにＰＲして登録をお願いするとか、情報発信が足りなくて知らないという人もいると思う。せっかく活動している所があって、登録さえしてあれば、いざという時でも使えるのが分かれば、困ったお母さんが「そうだ」となる。 　情報を出すのはお金をかけずにできる。出していると思うが、使ったことがないからとか、そこのハードルをもう少し使いやすい形にできれば。一番困ることはいざという時のことかなと。ほかのところも共通ではないか。
委員長	今出たご意見に関して、新たに付け加えたり、ブラッシュアップしたりできる

	ことがあるとすれば、情報発信のところになるか。
委員	これは人口減少対策なので、既にいらっしゃって子育てをされている方も大事だが、外から来やすくなるとか、今お子さんはいないけれど、そもそも子どもを育てること自体にハードルを感じてしまって、子どもはいいかなというところが解消されたら、それは人口減少対策になると思う。2つの定義で突破口的な、一人で育てている人も含め、外から来る人も、桐生が受け皿になるということであれば思い切り押し出して、一転突破できるものがあればいいと思う。
委員	「7　子育て支援に関する意見」は私が意見を出させてもらったが、しごとに関する意見と近いと思う。短期的な人口減少対策として、シングルマザーの方は都内でもたくさんいて、都内だと子育てもしづらい環境にあって、コロナもあって、こういう人たちが桐生なら安全で住みやすいよね、という情報が入ったとすると、桐生に引っ越してみるかということはすごく考えられる。「桐生はほかの市よりもサポートがすごく良いですよ。手厚いですよ。」となれば、こういう人たちが来て、地元の方たちと結婚して第2子、第3子を産む、育てるというのが理想で良いと思い、意見を出させてもらった。 「7　子育て支援に関する意見」は本議論と一緒に話をした方がいいという気がしている。
委員長	今いる人たちがもう満足度が高いということが、外から入ってきてくれる人たちの一つ大きな動機にもなるようなことなので、そこら辺で考えるというのも大事かなと思うが、委員はいかがか。
委員	この間、20代前半のひとり親、10代の時に産んでいる若いお母さんと話をして、強く自立した女性になりたいと思っているが、シングルマザーだから強がりたいというか、シングルマザーだからできないことがあるということがすごく悔しいという話をしていた。例えば、何か書類を取りに行くにしても、土日でないと自分はフルタイムで働いているから行けない。会社は有休を取って行っていいよと言ってくれるけれども、私はひとり親だから有休をとらなくてはいけないということがすごく悔しいという話をしていて、土日とか夜間とかに印鑑証明の一つくらい取れるようになっていればそういう気持ちにならずにいいのにね、という話をしていた。 皆優しいからいいよと言ってくれるけど、ひとり親だということが理由でその優しさを受けたくないという、その強がりが通るよう、しっかり女性が自立して、自分にとってもそれのせいでと思わなくて済むよう、少なくとも行政周りの手続きとか、入学前だといっぱいやることがあるので、夫婦でいてもどっちかが行かなくてはいけないので同じことかもしれないが、夫婦は2分の1になるのに対してシングルマザーは全部自分でやらなければならない。やりたいという気持ちはすごく大事だなと思う。うちもひとり親の事業を平日にやることが多いが、土日にやっても来ないのだが、それでもこの地域では女性が自立できることを支援し、全体的にいつでもどこでも、その人に合わせたスケジューリングが自分でコ

	ントロールできますよということになると、大変だし大きなことになってしまうが、すごく魅力的なまちだなと思う。予約制になるのか分からないが。
委員長	私は民生委員もやっているので、ひとり親の家庭に関わることはあるが、やっぱり行政に対する書類関係がどうしてもギリギリになってしまう。休みを取れない、行ってられないとなった時に、限度があるかもしれないが、日中じゃなくても、仕事を休まなくても、負担に思わないところで手続きができるというのは、気持ち的な負担、ストレスみたいなところでも、すごく大事なのではないかと思った。
委員	結婚していても有り難いと思う。
委員	ネットでできればいいと思う。印鑑が要らない書類が桐生市も出ているが、そういったことも知らなかったりするので、書類によっては必要なものがまだあると思うが、行き着くところで情報発信が大事だと思う。 前回でも出たが、色々な良い取り組みはしている。それが皆さんの所に情報として行き渡っていないので、そこができると、簡単に必要な書類が、これなら取れるというのが分かると思う。
委員	都内だと住基カードがあればコンビニとかで住民票が出せる。桐生でもできるといいなと思う。大分遅れていると思う。
委員	コロナ禍でネットの環境も進んできていると思うので、ほかでできているのであれば桐生市も徐々に。
委員	各々のケースが多すぎる気がするので、それを網羅しようとなると、土日夕方18 時まで絶対子どもを安心して預けられる場所があるとか、そういうアプローチだと、それぞれ必要としている項目がバラバラなので、あちこち整理するというよりは、ボコッと解決する気がするが、預けられるような場所は桐生にないのか。
委員	一時保育みたいな感じでやっている所はあると思う。
委員	18 時以降は、保育園は延長保育となるので、そこからお金が発生する。厳しい所は、1 分でも過ぎたら延長料金を払わなければいけないというのがある。
委員	例えば、まとめてアプローチしている場所が桐生市にあったとして、送迎でその一か所に皆集まるということがあれば、色々な問題がまるっと解決する気がする。
委員	フルで女性が働いて子どもを育てるとなった時に、18 時までにお迎えに行こうと思うと、結構忙しいと思う。特にシングルの方は稼ぎたいから、パートだっ

	たとしても遅くまで働きたいとなった時に、こっちに実家とかがあれば看てくれる人がいると思うが、外からシングルの人に入って来てもらうとなった時に、頼れる人がいなかったり、預けられる場所がなかったりというのが、だいぶネックだなと思う。 私はシングルで育ったが、おじいちゃん、おばあちゃんがいたからやってこられたと思う。預ける、預けないもそうだし、金銭的な部分も、うちの母はフルで働いていたが、それでも収入、小学校の時に一回だけ母親の源泉徴収票を見たことがあるが、年間 220 万円であった。220 万円は、今と当時の金銭感覚は違うと思うが、おじいちゃん、おばあちゃんがいなくて、本当に一人で子どもを育てようと思ったら、給食費はかからないし、医療費も 18 歳までは無料にしてもらってきたが、かなり厳しいと思う。その先の教育のことまで考えたら、今は皆義務教育だけで終わらないし、女性でも大学までという家庭も多い中で、預けられる先を作るということも大事だが、女性が一人で働くにあたって、給与水準とか、安心して子どもを育てていけるぐらい、一人で稼げる仕事というのは必要だと思う。
委員	預けられるという場所があるとすれば売りになるのか。
委員	なると思う。母は保育士で、今でもパートで行っているが、延長保育の部分で、18 時までに迎えに行かなければとギリギリで駆け込んでくるお母さんがすごく多いとのことである。保育園側からは 18 時を過ぎたらお金を払ってもらってねと言われる。保育園の時計とお母さんの時計が 1 分違っていたらどうするのかという問題になる時もあるとのことである。17 時から残っている子どもには夕方のおやつが出るけれども、17 時ギリギリに迎えに来た子どもたちには、おやつを配っているのを横目に帰らせるのが可哀想とか、そこは仕方ないが、お金が追加でかからずに、18 時を過ぎても安心して預けられる場所があるというのは、女性が子どもを抱えて働いていくのに、すごく安心材料になるのかなと思う。
委員	夜間預かられる、公立はないけれど、民間も含めて夜間託児施設はないのか。
事務局 （企画課長）	夜間はない。市内全保育園・認定こども園は、延長保育はしていると思う。お金がかかるという話はあるが、1 時間、2 時間預かれる体制はできている。保育園で預かっていないお子さんで、急には無理だが、この日は用があるということで一時保育するという制度も何園かでやっている。
委員	夜間保育できる所があると良い。
委員	民間でもないか。太田市ではあると聞いたことがある。
事務局 （企画課長）	桐生にはない。噂では太田市ではあると聞いたことがある。
委員	延長保育の料金は、所得によって変動はあるのか。

事務局 （企画課長）	延長保育は園によってである。非課税世帯は確か無料になると思う。確認してみないとだが。
委員長	18 時までというのは何か決まりがあるのか。
事務局 （企画課長）	確か保育園は標準時間 11 時間開所である。多分 18 時までと言っている保育園は、7 時に始まっている保育園だと思う。開所時間が園によって多少違うので、18 時半まで見られる所もあると思う。そこが保育園の特色になってくると思う。11 時間は必ず開所している。
委員長	11 時間でないと駄目というのは法律にあるのか。
事務局 （企画課長）	駄目というよりは、11 時間は開けなさいということである。
委員長	11 時間以上は駄目なのか。
事務局 （企画課長）	保育園というのは、国の規定により、人件費を預かった子どもの数などでお金がもらえることになっているので、当然多くすれば、そこに保育園の持ち出しが出てくることになる。そういった意味では、保育園もまずは 11 時間開所ということになってくる。 延長保育をすれば、延長保育事業ということで、そこに補助金なりが出る。延長保育はほとんどの所がやっていると思う。お金はかかるが、預かる体制はできていると思う。
委員	延長があるということは、それ以上にやっているということである。
委員	延長やっている所で、そのまま延長ではなくて、まとめるということをしたら、多分人件費が削れると思う。延長の子は迎えに行って一か所にまとめて。
委員	迎えに行けるのであれば、行けてしまうのだと思う。
委員	19 時までとかではなく、22 時までとかできれば良い。
委員	残る子をまとめるバスがあればいいと思う。迎えに行くのはその一か所に行けばいいという感じで、極端なことを言った方がいいと思う。 普段賢い人が集まって出ない案をどんどん言って、一つでも当たればいいと思っている。
委員	理想と現実で、理想がこうなると、というのは絶対に必要だと思う。
委員	それは個の世帯の話ではないか。シェアハウスみたいに、複数の世帯が、一緒に住まなくていいとは思うが、数世帯が個ではなくて、まとまって生活できるよ

	うな形で、うちはたまたま今日迎えに行けなかったけれど、お隣さんの家が代わりに迎えに行ってくれる、色々な人間関係はあると思うが、そういうのを希望して入る人も中にはいるのではないかと思う。一つの箱の中に全員となると抵抗もあると思うが、コミュニティの中に住む場所が付いているみたいな、昔の長屋みたいな、皆で支え合うみたいなのがあってもいいのかなという気がする。 特に外から来た人は桐生のことを知らない人が多いので、情報を共有したりとか、慣れるまで3年くらいそこに住んで、4年くらいから自分でほかの所に単世帯で住もうかな、というのがあってもいいのかなと思う。 どうしても単世帯で考えると色々なハードルがものすごくあるという話を聞く。
委員	もう一個だけ言っても良いか。3 歳未満児の保育料がどうにかならないか。3歳から全員無償化だが、意外と3歳未満児の金額がそこそこで、収入によって変わるが、それでも結構そこそこ、ひとり親家庭では下の方だから、何級というのがあると思うが。等級のマックスの3歳未満児の場合、月3万5000円とか4万近く、3歳からいきなり0円となる。でも未満から入れないと園によってはキャパがいっぱいになってしまうことがある。
委員	近隣の町村に住まいとそういうサービスがあれば、その時にすぐに引っ越してしまう。それが委員の言う、毎年1,500人も減っていくという、その多くは、自然減、人が亡くなって出生数の差もあるけれど、転居する、それもすごい遠くに行ってしまうのではなくて、みどり市だったり伊勢崎だったり太田だったりというのがほとんどである。ある程度住める良い環境とそういう人たちを逃さないような制度があればいい。そこのところを市が全面的に負うとか。
委員	3 人目からは金額が違ってくるが、3 人はなかなかいかない。3 人一緒に保育園に入っていないと数に数えてもらえない。6 歳違いとか 7 歳違いとかは駄目で、一緒の園の中に入っていないと無償にならない。
事務局 （企画課長）	一緒の園の中でなくてもいい。何歳未満というのはあるが、桐生市の場合、国の基準を拡大して、扶養に取っていれば見ると思う。国の基準を拡大して無償化している。
委員長	もう一歩踏み込むと、そういう部分で具体的に助かる人たちが増えてくる。
委員	それを打ち出して、情報発信して、すごいことなんだということを。
委員	実際に常勤で勤めている人は育休があったとしても長くて 1 年。子どもを預けなければならないから、その場合に金額が高いと、いくらかでもそこは検討してもらえれば。
委員	人口減の話の中で、色々な人たちを集めるのは難しいから、できればターゲッ

	トを絞って、小さい子どもがいる、生まれたての子どもたちがいるような世帯に来てもらう、あるいはシングルとかでも大歓迎ですよというような形だと、特色として出てくる。どこかターゲットを絞らないと、多分あれもこれもというわけには、お金も無いから、ポイントはその辺が一番良い気がする。
委員	委員が言ったとおり、不動産屋やってきて、産む時に出ちゃう人が結構多い。本当に微々たるものだと思うが、例えばみどり市に行くと給食費が無料ですよとかになると、それだけでも地域を決める理由の一つになってしまう。今の3歳未満児まで無料になるというのは大きいのではないか。そしたら桐生で産みたいと思うのではないか。
委員	給食はまだ先の話だが、保育はすぐである。それはいいかもしれない。
委員長	そうするとハードルが下がって仕事に出たいという人も出やすくなる、長い時間働ける、そういう仕事も選べるようになるというところで、選択肢が広がって、本当に働きたいと思っている方々にとってはすごく良い環境が整うのかなと思う。 それでは、まとめは、3歳未満児の保育料の補助ということで。
委員	今案を決めれば、次回までに桐生市に 3 歳未満児が何人いるかどうか分かるので、予算がいくらかかるかも分かる。
事務局 （企画課長）	次回、ご用意してご提示する。3歳未満児の数と想定される財源をお示しする。
委員長	3歳未満児の保育料の補助というところで、これが派生して働きやすくなるという感じで良いか。 では次にいく。
委員長	続いて、「商店街の空き店舗等を活用し、低リスクで気軽に出店できるチャレンジショップのような起業ができる所があるといい。」という意見であるが、具体的に何をどうしたらいいと思うか。
委員	実際に私はＪＲと協力し、きりゅう市民活動推進ネットワークのサポートを受けて、「オーライ」というチャレンジショップを運営している。ただ、それは行政からのサポートを受けていないので、「オーライ」のようなお店を増やしていくのか、「オーライ」の規模を大きくしていくサポートをしていただくとかあるといい。そもそも市民活動の一環として出店者には低リスクで出店していただいているので、その取組を広げていけるといい。
委員	ほかにもチャレンジショップができると聞いた。本町五丁目辺り。
委員	その話は未定だと思う。

	それで言えば、私も観光物産協会で働いている中で、いろんなイベントの話をいただく。例えば、日本遺産活用室から観光物産協会を通して出展者を募ってほしいなど。今年度組織が桐生市から独立したが、その中で、物産まつりで高校生にショップ運営などをゼロからチャレンジする機会を設けてあげたいという意見が多く出た。桐生には商業高校もあるし、桐生第一高校には調理科があり、今、製菓がとても頑張っている。自分たちで作って、それに値段をつけて、販売をする。直接それを買ってくれたお客さんと対面でお話しする。やはり自分が作ったものを選んで買ってくれるというのはものすごく嬉しいことだと思う。ものづくりはそこが醍醐味であり、その気持ちを知ってほしい。特に桐生はものづくりがすごく盛んなまちになりつつあるので、そういった経験から、桐生でお店を出したいとか、そういうきっかけをつくるために、イベントの時だけでもチャレンジショップのようなことができるといいなという話が出ていて、来年度辺りから実現させていければいいなと思っている。
委員長	チャレンジショップを広げていくに当たって、具体的に行政にやってほしいことはあるか。
委員	「１　仕事に関する意見」の「例えば商店街の空き物件の固定資産税を減免するなど、お店が入るように活用を促進すると桐生が潤うと思う。」にも関連してくるが、現在、前橋市や伊勢崎市、遠くは名古屋市の方が出店してくれている。チャレンジショップを運営する中で、手応えを感じて桐生でお店を持ちたいとなった時、物件のオーナーからすると、現状で固定資産税が高く家賃を下げにくいこともあるので、物件を持て余しているオーナーの固定資産税を少し下げることで、出店者も借りやすくなるのではないかと思う。
委員	借り手がついた時点で下げるとか。
委員	逆の意見になるが、桐生市の固定資産税は年々下がっており、そこまで大したことはない。地価も下がっており、本来オーナーはもう売りたいくらいであると思うが、売れないし、固定資産税を減免するのであれば、桐生市から補助してあげる方が、店を出す人の得になる。例えば、何か不備があった時に、大家さんに直してくれといっても家賃下げたから直さないよと言われてしまうかもしれない。責任の分担があるので、補助を手厚くする方がいいのかもしれない。
委員	移住支援金があると思うが、それは入った時だけもらえるもので定期的にもらえるものではない。例えば、5年間お店を続けると約束してくれた人に対して5年間は家賃の補助をできるようなサポートをするとか、そういったことはできたりしないか。開店時の一時金は店舗の改装に充てているので、それ以降の家賃には反映できないと思う。月額で多少サポートがあるとお店を出しやすいと思う。
委員	チャレンジしやすい土壌はある気がするので、公的にどうするというのは難しいと思う。そこがなくてもどっちにしても続かないと思うし、桐生は良い店なら

	ば続けられる気がする。自然淘汰される部分を補助するのではない気がしている。
委員長	チャレンジして実際に桐生でお店を持つという流れは有り難いが、やはり商売なので、上手く軌道に乗せることができる時とそうでないと時の見極めについては、シビアだと思う。もし補助金を入れるのであれば、ある程度の期間を設けて、その間に軌道に乗せていただくようなところかと思う。
委員	確かに期間で判断してというのは重要であると思う。
委員	そういう意味ではチャレンジショップが一番良いのではないか。店を始める時に一番気にするのは、マーケットにフィットするか低いハードルで確かめることができるところであると思う。皆さんの言うとおり、実際に自分でお店を始める時に手厚くしすぎると、桐生の良さは良い意味で自然淘汰され、すごく良いお店が残るというところであると思うが、そうでなく延命することで逆効果になるようなことも有り得る。商売はあくまでシビアだが、入りやすい環境は整えて、まずは「オーライ」でチャレンジするような、もし「オーライ」が狭すぎれば、2号店、3号店を出すという形の方が、話を聞いているとすごく建設的な気がする。
委員	先ほどの委員の学生の話にもあったが、貸せる場所を募って、学生は学生に意見を募ってみれば、予算付けしなくても、マッチングすれば実現可能である。私の店も貸してもいいし、場所を提供してくれる環境は、桐生は恵まれていると思う。受け口だけ作っておくことが大事であると思う。
委員長	行政がコーディネーター役で動いてくれると、スムーズになると思う。
委員	今、コーディネーターはどういう機関がしているのか。プラスアンカーのような所か。
委員	「オーライ」であれば私の所である。
委員	委員の所に相談がいった時に、それが仕事としてお金にならないところが問題であると思う。
委員	そこはぜひ何とかしたいところである。
委員長	「オーライ」以外にも場所を使っていいという所は、探せば結構ある気がする。そういった情報をまとめて持っているのがコーディネーターである。高校生や出店希望者の連絡口となり、振り分けられる窓口を一箇所設けるといい。
委員	もしかすると一番近いのは市民活動推進センター「ゆい」かもしれない。色々な所で紹介はしているが全体的な情報が来るかというとそうでもないので、どう

	しても役割が違ってくると全体的なものは難しいが、案内をするだけであれば情報をもらえれば案内はできる。
委員	貸したがっている人はいるのか。
委員	商店であれば、市の空き店舗のリストがある。
委員	今の話だと不動産屋が悪い。貸したい人はいるはずなので、例えば家賃 10 万円で貸したい人がいた時に、空いていても仕方ないから、5 万円でチャレンジさせてあげましょうと不動産屋が説得すればいい。そこにコーディネーターがいれば、そこでマッチングすればいい。不動産屋は家賃が高い方が手数料も高いから、積極的に動かない。我々の業界も手助けをしなければいけない。不動産業界と物件のオーナー、市も含めてだと思うが、借りやすくするようなサポートをしてくださいと言ってもらえれば、我々も不動産組合として動く。
委員	組合と一緒にするのであれば、桐生市が間に入らないといけない。
委員	貸さないままだと損するけど、貸すと少しは得するというような制度を作っていただけると。
委員	仕組み作りだと思う。そういうのは我々の仕事なので、やらせてもらえればできると思う。
委員長	これまでの話を聞いていて、皆それぞれの場所で考えているが、それが繋がらないという状態であるように思う。行政ができるのがそれをつなげることであると思う。
委員	行政は入らない方がいいと思う。お金が関わることなので行政が入ると喧嘩になってしまう。やはり我々が業者として入った方がいい。もちろん無視するわけではなく、行政にも入ってもらった方がいいが、行政主体になると個人的な感情がでてきてしまう。
委員長	そうすると、この件について行政に手伝ってほしいことは具体的にどういうことになるか。
委員	不動産組合が 2 つあるが、今のような意見を両方にお願いのような形で発信してもらって、説明会でも開いていただければ分かってくれる人はたくさんいる。
委員	コーディネート機関があって持続可能に回らないと、善意に頼るしかなく、いずれ回らなくなる。市からの委託などにより、ちゃんと回る団体を作らなくてはいけない。一番分かりやすいのは、例えば「ゆい」の中につくるなどして、そこ

	で回るまでの間の何年かは補助するとか、自走するまでのフォロー期間を設けないと終わってしまう。 　もし、今後チャレンジショップを続けることがしんどいとなるとしたら、桐生のまちの特徴を打ち出す一点突破だと商店街の空き店舗は外せない。桐生が今後ほかの都市よりもすごいとなる方法の一つとして、どんどんお店をたくさん作って、人が回り出すという逆転の発想が必要かもしれない。人がいるからお店ができるのではなくて、面白いまちを創って、そこに人が回り出す。そのためのチャレンジショップが続いていかないのならば、最低限回るだけの補助を何年か付けるのは、予算の使い方としては分かりやすい形であると思う。
委員	それに関しては、商店連盟協同組合の事務局が商工会議所の中にあるのだが、全体を把握しているのは商店連盟協同組合の事務局の方が分かっているため、そういったところにも声を掛けながら一緒にやっていかないといけない。商店街のことなのに何も知らないとなりかねない。
委員長	そうなると、行政が主体になるというよりは、関わる方々にお声掛けをして、その人たちを集めて同じテーブルに座っていただくというイメージでよろしいか。
委員	今までの経験からすると、商店街という話も出たが、組織全員の考えをまとめるのは難しい。単体で走って、周りもやっているからうちもやらなくちゃ仕方ないくらいになっていった方がよく、そうでないと変な風に固まってしまうケースが多いのだが、どうだろうか。
委員	今の理事長が、とても動きのいい方なので、タイミング的には今だと思う。
委員長	理事長さんたちの人柄も見計らって、声を掛けていただくような形で、行政にも関わっていただくということでよろしいか。
委員	理事長にお願いする中でも、商店街に何を協力してもらうか、例えばお店に家賃交渉の際に不動産屋から相談があった時には協力してほしいとか商店街としてできる役割のお願いをしていった方がいい。
委員	そうすれば市に音頭を取ってもらって、我々不動産組合と商店街の組合で一緒に意見交換をすることはできると思う。
委員長	続いて「桐生市内で女性の雇用に力を入れている企業を集めて女性向けの合同企業説明会を開催するといい。」であるが、ご意見はいかがか。
委員	通常の合同説明会をしている企業にできるかどうかまず呼びかけてみてはいかがか。ただ、男女共同参画の観点から、女性だけというのは難しいかもしれない。企業は特に。

委員長	企業は特に敏感だと思う。上手くやっているところに協力をお願いするのはどうか。
委員	女性を募集したい所だけならどうか。それも微妙か。
委員	そういったことを桐生市がやるのはすごく気持ち悪いと思う。
委員	でもたまにやっている気がするが。託児所がある会社みたいな。
委員	女性歓迎などはあるかもしれない。
委員	女性向けとすると、なぜ男性は駄目なのかとなってしまう。前回はこういった説明会があったらいいなという意見であったが、実際に投げかけるのは難しい。
委員長	少し難しい。ということで次の「例えば商店街の空き物件の固定資産税を減免するなど、お店が入るように活用を促進すると桐生が潤うと思う。」は先ほど終わったので、その次の「起業支援について、インキュベーションオフィスもあるが、例えば新桐生にある平和ビルをワーキングスペースとして無料で利用できるようにするなど、拠点を作ることが重要。」に関する意見はいかがか。
委員	これは私の意見だが、とんでもなくお金がかかる話だから、あくまで例えの話だが、実際この辺の人たちが働く場所がない。大きな企業をもってくるのは難しいが、群馬大学などがあるのだから、そういった人たちが起業するために簡単に借りられるスペースがあればいいと思う。
委員	ワーキングスペースがないわけではない気がする。例えば地場産業振興センターの２階のように。こういう所があるという情報をまとめられればいいのでは。
委員	そのとおり。周知が必要である。
委員	場所云々というよりも起業支援という形で、起業するためのフローなど、どうやって起業するのかということを中学生や高校生のうちから授業の一環として少しずつ教えるのも、起業したいと言う子どもたちも多いし、雇われるだけが仕事じゃないということとかも、そういう意味での起業支援を子どものうちからできたらいいと思う。
委員	ココトモはこういったワーキングスペースの貸し出しはしていないのか。
委員	している。
委員長	やはり場所はあるのでＰＲではないか。まとめサイトのように情報がまとまっている所があれば。

委員	どこがいくらで何時に使えるというような情報を全て把握している場所が一つあればいいと思う。
委員長	それは可能であると思う。必ずしも行政じゃなくても、実施している所でまとめサイトを作ってもらったりできると思う。
委員	今、県の移住担当課でも作ってくれていて、群馬県のワークスペースのまとめサイトはある。
委員長	県でまとめているものがあるのなら桐生市のホームページからリンクで飛べるようにしておけばいい。
委員	Ｗｉ－Ｆｉや電源がどこで使えるかも大事。
委員長	そういった形でよろしいか。 （一同同意） 続いて、「桐生市は伊勢崎市や太田市のように広い土地があるわけではないので、山間部でもできるような、自然環境を生かせる企業を選んで企業誘致することも大切。」であるが、どうか。
委員	山間部といっても地域住民の声もあるから、昔、企業誘致に梅田の方で反対したというような話も聞いている。
委員	山間部という言葉が入ってしまうと、宅地造成等規制法が厳しいので、現実的に無理だと思う。山間部を削って企業誘致だけにすればいい。
委員	それなら新里の方で既にやっている。
委員長	今後も続けていくということか。意見として出てるということでよいか。 （一同同意） 続いて、「精神疾患や病気で一度離職した後に職場復帰することに不安を感じている女性が多いので、職場のアルコール消毒とか整理整頓のような易しい仕事から始めて、少しずつ書類作成などの業務に移行していくような、リハビリのような就労支援事業があるといい。そのような女性を含めて弱者に優しく、居場所があって活躍できるまちづくりができると、自死などの自然減も減っていくと思う。」についてはどうか。
委員	桐生市内の精神科や心療内科でリワークプログラムのようなものをやっている所はあるのか。
委員	あまり聞かない。心療内科が桐生市は少ない。確かに色々な所で何をやっているかが分かりにくい。

委員長	これを行政が全部把握するのは難しいかもしれないが、医療、教育、空き店舗、仕事などのところで把握して、つなげられるような動きが何かあると助かると思うところではある。実際、桐生にはリワークプログラムは無さそうであるが。
委員	こういうのがどこにあるのかなというのが分かりやすいホームページにしてもらえたらと思う。調べる側の立場に立っていない。
委員長	そのとおり。どこまで潜れば情報にたどり着くのかという状況である。
委員	ワーキングの一般市民公募の方法を調べようとしたが出てなかった。利用者に優しくない。
委員	今回のゴールは最終的にそこな気がする。 専用のアプリがあって、編集なり、掲示板作るなりすればいいと思うが、管理できる感度がここのメンバーにある気がして、ただ継続していくための仕組みづくりが最終ゴールな気がする。やっている内容も良いし、疑問点もあるし、困っている人を助けられる人もいるから、そこを結び付けて交通整理できる一個があれば、解決する気はする。
委員	欲しい情報にパッと行けずに迷い、調べるのが嫌になってしまう。
委員	市としてそういう画期的なものを持っていることが売りになれば一番良いと思う。
委員	一番分かりやすい一点突破だと思うが、どこまでやるのか、コーディネーターとセットで考えないといけなくて、情報にアクセスできるが、そこから一歩動くのに結局分からない。どこに行ったらいいのか。私も移住した時に、住宅を探すだけでも、その中でたらい回しになった。今回出てきたものを横断して、コーディネートと情報を正しく発信して、かつ運用しなければいけないので、和崎委員の言うとおりどこを母体にするかであり、市に持たせてはいけない。行政がやるべきことは別にあるので、民間の感度の高い人がやるべきである。ただリンク集を集めるのではなく、魅力的にキュレーション[1]して届けることをできる人がいいと思う。そういうやる気のある人、委員のような人がいたとして、その人が善意で、毎日更新してとはできないので、一部補助するのか委託事業にするのかというのは当然ながらした方がいい。それを一点突破として、総論全部横断したものになるけど、それができたら桐生はすごく画期的であると思う。
委員	そこに価値があるということをどれだけみんなに認知できるかだと思う。
委員	この間仕事で行った山梨県富士吉田市は、定住促進センターという団体があって、そこが仕事も教育も子育ても移住も全て横断で支援をしている。そこのメン

[1] 情報を収集・整理し、それによって新たな意味や価値を付与すること。

	バーが面白くて、ただ団体を作ったわけではなく、桐生市と同じ繊維のまちなので、デザイナーや繊維関係で企画やコーディネートできる人が、完全な職員でなく、緩やかに皆がつながってグループを形成している。理事のような人はもちろんいて、中心になって回していくのだが、そういう団体が桐生にないのであれば作った方がいい。やる気のある人はいると思う。もし既存の団体を束ねるということならば、横断機能があってもいいと思うが、現状どこまでできているか分からない。「ゆい」の中にあった方がいいのならそれもいいと思うし、いずれにしろ横断できる機能がないと、人口減少対策で移住するにも、誰か知り合いがつながったら話を聞いて盛り上がるが、横断して斡旋することはできないから、コーディネーター的な機関に託すという意味では、情報発信とコーディネートをセットで予算を付けると一番分かりやすい。
委員	移住定住コーディネーターがいる自治体も増えてきたし、桐生にも希望している人はいる。地域おこし協力隊には、そういったところの役割を協力したいという人もいる。やっぱりやる気があって桐生に来てくれた人たちが、地域おこし協力隊の 3 年間という任期なので、任期後に自分が体験した中で力を出せるような仕組みづくりも必要である。ボランティアでは難しいと思うので、新しく何かを作るのであれば、そういった人を入れるのも悪くないと思う。
委員	ちなみに富士吉田市もメインは地域おこし協力隊であった。デザイナーなど別の仕事を自分でやりながら、属する人もいれば、そうでない人もいて、みんなで共通してメディアを運営していて、そこで色々な暮らしについてホットなトピックスを発信している。そうすると暮らしが分かるので、興味を持った人が発信者を目掛けて遊びに行って、現地の人たちを紹介してもらってというのができる。みんなで一個作るのは大変だが、どこか母体となる組織ができれば、全ての問題が解決する突破口になると思う。一点突破を本当に求めるのであればそれが一番分かりやすいと思う。
委員長	今の話は「３　情報発信に関する意見」のプラスアルファの話になってくると思うが、すごく大事なことだと思う。桐生市は良いことをいっぱいやっているが、知らなくてリーチできないことがあり、その中でもブラッシュアップしていかなければいけないことや足りないところもあるが、まず、あることを知ってもらうことが大事であると思う。今の話のように緩やかな組織を作ってみたり、ホームページを改良するなど。
委員	話題ごとの掲示板があって、ただ公的にすると内容の制限があると思う。パッと聞けるとすごく楽だし、そこに受け口がある、今回でいうと 8 項目ある中で、そこにちゃんと飛べるようなサイトを作ればそれで十分だと思うし、システム的にそんなに難しくないと思う。そこの予算くらいなら実現可能でかつ皆の悩みが解決しそうな気がする。
委員長	ホームページの情報が取りづらいという点は皆同意見であった。

委員	見やすいかどうかという感覚については、システム会社が桐生にたくさん来ているので、可能な気がしている。
事務局 （企画課長）	例えば、色々なコーディネートする団体があって、そこでホームページなどを作って、リンクを貼るようなイメージか。
委員	最終的に桐生市のホームページにリンクが飛んでいってもいいが、インターフェイス自体も文字だらけなので、どれだけ柔らかくするかにデザインを注力してカジュアルにするということは、それこそ子育てという項目がちゃんとあって、主要な悩みが何個か書いてあり、公的な文章がありつつ、掲示板もあり、常に更新され潤っている状態にできれば、すごくいいと思う。掲示板にシングルマザーの項目があればシングルマザーが悩みを書き込めて、そういう解決策があるんだとなることもある。皆のよくある悩みなどに赤線を引いてあげる人が必要で、それを雇って運営できればいい。全部並列ではどこを見ていいか分からなくなるので、どこに着目すべきかを選定する人が必要である。
委員長	ホームページを定期的にブラッシュアップする部署はあるのか。
事務局 （企画課長）	実は、今のホームページはブラッシュアップしたところである。
委員長	児童手当について検索してみたところ、児童手当という項目をクリックして進んだら、もう一回児童手当という同じ言葉が出てきて、もう一回クリックして、という作業をあのホームページはしなければならない。ちゃんと管理しているのかなと思わせてしまうホームページだといかがなものかと見ていて感じるところである。先ほど委員が言ったように片親の世帯が欲しい情報をまとめるとか、それぞれの情報がリンク先に最終的に飛んでもいいし、移住者用にも情報をまとめて、リンクさせるだとか、そういうきめ細かい見る人への対応がホームページにあってもいいのかなと。最近、桐生市がメディアにたくさん出ていて、興味を持ってくれる方も多いと思うが、どんなまちか検索した時にイメージができないのはもったいない。
事務局 （企画課長）	それでいうと、少し前にはなるが子育て情報というところで切り取ると、私が子育て支援課に在籍していた時に、情報の発信については、色々考えていたが、やはり行政の発信は固くなってしまうし、ホームページ上の型にはまったものしかできないので、委員のキッズバレイにお願いして、「おやここ」というサイトを作った。 行政側も上手く発信できないのは分かっていて、民間の力も借りながらやっていきたいが、なかなか難しいのも現実であり、今後色々な事業をブラッシュアップしていく中で、情報発信のところが中心となってくれば、我々もホームページを担当する課を呼ぶことも考えていきたい。
委員	行政で出せるものと出せないものあると思うので、その部分は上手にリンクを

	貼るというような形でいいと思う。リンク先がしっかり情報を出していないといけない。
事務局 （企画課長）	情報発信のところで、色々な意見をいただいたので、今日のところはそこに課題があるということをご提議いただいたということで、少しこちらの体制も整えて、もう一度そこを議論していただくということでよろしいか。
委員長	情報発信については次回もう一度やる。 この項目については、きちんと情報発信ができればということで、「２　住宅に関する意見」に移らせていただく。 まずは、「きりゅう暮らし応援事業（住宅取得助成）の夫婦加算について、 もう一段階追加し、若い世代の夫婦に対して加算を増やすとともに、家を新築すると、税制上、固定資産税が３年間２分の１になるが、若い世代の夫婦には更に上乗せで税制優遇をするといい。」というご意見であるが、いかがか。
委員	自分が出した意見で恐縮であるが、後段の「税の優遇措置」の部分については、きりゅう暮らし応援事業の見直しの中に含んで考えた方が簡素化されていいということで、追加で意見させていただく。
委員	きりゅう暮らし応援事業については、我々の不動産の業界や商工会議所からも継続をお願いしている。今の市長も、市長でいる限り継続したいと言ってくれている。補助金額は、最高で 200 万円であるが、現実的に 200 万円をもらえる人がいなくて、75～80 万円くらいが多い。 統計を見て分かることだが、利用者は、転入よりも、定住の方が多い。我々の業界では、人が出ていくのを阻止することも人口減少対策になるので、ある程度、定住、定住ということで活発に動いている。 もちろん移住に対してもやっているが、移住は、結構桐生市は、群馬県の中、全国の中でも、空地・空き家バンクの宣伝をすごくやっている。国内でもすごく評判が良く、成約件数もすごく多い。そのような中で、現金を貰えるというのはすごくメリットが有って、この３年間くらいで成約件数がものすごく増えている。コロナ禍の中でもかなり来ている。都内から来る人もいるが、太田市から来る人も最近は結構いる。太田は、最近も企業でクラスターが出ているが、やはり太田の会社は大きい。生活するには桐生の方が安全と言うことで、桐生を再検討している人が多い。この事業をやっていれば、そこそこ成果が出ている。ブラッシュアップと言うか、毎年少しずつ変えてはいるが、大枠はこれである。 私個人的には、きりゅう暮らし応援事業を今後も続けてもらいたい。
委員長	とにかく続けていただきたいということか。
委員	それが全てである。
委員長	マイナーチェンジではないが、色々と検討すべきところはあるというところ

	か。
委員	若い世代への加算の部分である。
委員	市の担当は都市整備部であり予算も取ってもらっているが、同じ市役所の中でもこの事業を止めた方がいいと言っている課もあるわけである。 私からすると、役所の中で統一してもらってやってもらわないと、地元のためにならないというように位置付けてもらわないと、そっちの課はお金がないから止めた方がいいという問題では無いのである。 この事業は、200 万円が最高であるが、100 万円くらいのお金というのは、私が聞いたところによれば、4 人家族が定住してくれれば、5 年後に元が取れるそうである。色々な経済効果や固定資産税を含めて。回収できる見込みがあるものなので、どんどん予算付けしていった方がいいと思う。極端に増やす必要もないと思う。ほかの県内市町村に比べてすごく多いので。これは素晴らしい。
委員	これは市外から来た人だけが対象なのか。
委員	定住でも、建て替えでも対象。
委員長	それは意外と知らない人が多いと思う。
委員	造った後では対象外か。
委員長	造る前に申請か。
委員	出来上がって暮らし始めてからだと思う。
委員長	出来上がって暮らし始めてから、どれくらいまで申請できるのか。
委員	1 年だったと思う。
委員長	それであれば申請したかった人もいると思う。
委員	知らなければ申請できない。
委員	建築屋が分かっていて紹介していると思う。
委員長	建築屋が知っていて紹介してくれればいい。
委員	普通は紹介してくれる。
委員	大工とか。

委員	ハウスメーカーとか。
事務局 （企画戦略担当係長）	住宅取得応援助成については、住宅の取得が完了してから 90 日以内に申請していただく。
委員長	3 か月くらいか。施主等に情報が伝わっているのであれば利用してもらえる。
委員	支給率はかなり高く、90 何パーセントである。
委員長	それであればいい。実際にそういう所でやっている方のご意見で、庁内でしっかりしてくださいということでよいか。
事務局 （企画課長）	それでは、大枠では継続ということでよろしいか。
委員長	大丈夫である。
委員長	次に、人口が増えていく期待が持てる地域で今まで以上に住環境の整備・投資をするといいということだが、何をしたらよいか。
委員	人口が増えていく期待が持てる地域ではなく、人口が減少する幅が少ない地域ということである。
委員長	言い方の変更で。
委員	増えているところはないと思う。細かく言えばあるかもしれないが。
委員	例えばどの辺の地域になるのか。
事務局 （企画課長）	新里。
委員	桐生でいえば相生であるとか。
事務局 （企画課長）	あるいは境野あたりでも、もしかしたらあるかもしれない。
委員長	広沢はどうか。
事務局 （企画課長）	今手元にはないが、やはりその周辺部については、人口の減りは少ない。もしくは局地的に見れば、増えている場所もある。新里では局地的に見れば増えている。新川あたりはどうか。
委員	新川は減っている。新里駅周辺ではそういうことになる。町会単位では増えているところもあるが、区単位では減っている。

委員	専門の業者なので。人口減少については、新里地区は入っていないと思う。旧市街地なので。本来ならば旧桐生市の再開発ができればいい。コンパクトシティということが決まっているのでできない。旧市街地の人口減少が著しく激しいので、旧市街地のことを考えると、相生はヤオコーができて整備されている。広沢に関しては、店が少ないので整備されていないが、50 号バイパスがあって、広沢地区に住む人は、そこに定住する人と、外から来る人は、太田、足利、前橋などに通っている人がいて、結局交通アクセスがよいから桐生市に住みたいという人が多い。旧市街地の場合は、旧市街地に住みたい人は多い、いなくはないと思う。 今日も話が出たが、例えば、天神町から山の手は昔でいう高級住宅街なので、昔から病院とか郵便局とか皆あるが、人が少なくなってきたので、それが多少さびたような空気がある。しかし、昔の繁栄していた地区は、起爆となるものができると絶対再生する。まちなかに核となるような施設は、今はドン・キホーテしかないので、核となるものを呼んできて、区画整理は桐生ではできないと思うので、再開発していくような方向に持っていければいいと思う。これは市が指導してできるかというと、難しい問題があるとは思うが、まちなかに生活しやすい状況がないので、これまでの話では本町通りなどで店が埋まったとか、活気が出るような話だが、実際にそこに定住しようと思うと、そこで生活が全て間に合うような、そういうまち並みができてこないと駄目なので、それが欲しいという感じがする。
委員長	実際、私が子どもの頃、本町通りなどで歩行者天国をやっていた頃、店の上に住宅があった。そこに人が住んでいて市街地に人口があったと思うが、店が入るけれども、果たして昔みたいにそこの上に人が住むかというと、なかなか住みにくいまちであるとの印象がある。
委員	大体、店の人が住んでいた。
委員長	店兼住宅で、1 階が店で、上が住宅。
委員	その人たちが外に家を作りはじめた。空き店舗で貸せないものは、住宅として、上だけ住んでいるところもある。
事務局 （企画課長）	委員の「生活の核となる場」というのは、スーパーみたいなイメージか。
委員	そのとおり、生活に必要なものはスーパーマーケット。病院は桐生には多い。辞めてしまうところもあるようであるが。
委員	魚屋、肉屋などの専門店が桐生には結構あるのはいいと思う。スーパー等がないから私はここに住んでいるというのがあるので、既存の生態系とのバランスがどこまで取れるかというのが、急にヤオコーみたいのが市街地にできるというのはバランスが難しいのかと思う。住む場所として市街地を取るかどうかという

	と、時代が流れているので考えなければいけないと思う。人を呼んで商業として儲けるまちにして、そこに住むということにこだわるかというと、別のベクトルな気がする。
委員	やっぱり、まちを形成するためには、最低人口というものが必要。人が定住しないと税金が入ってこないので。それではインフラ整備を誰がやるかというと、当然市役所に頼らなければならないが、市役所では今のインフラをいくらで維持できるかという予算もあると思う。その予算を取るためは最低人口が何人必要で、最低人口を何人にするためには、この地区に何人くらい住んでもらわなければならないということも出てくる。 店が中にあって外に住んでいるということになると、店だけのインフラ整備はできるが、そこに昔から住んでいる人のインフラ整備を誰がやるのか、人がいなくなればなるほど、一世帯に占めるインフラ整備の割合が増えるわけだが、まちづくりとして考えてくると、店ができて、繁栄して、賑わう、そこの周辺に人が住むということがセットにならないと、まちの形成として、まちの維持としても難しくなる。天神町に住んでいる人たちが、あと 20 年、30 年経った後で、今の人口の半分になってしまった時に、そこで水道が破裂した、道が壊れたので直してくれと言われても、そこの人口が少なければ当然人口が多いところが優先順位で上となってくると、住みづらいまちにどんどんなっていく。そういうことを考えて、今回入らせてもらった。 今言われたことは確かにそのとおりなのだが、人口減は仕方ないことで、これを止めることはできないので、いかに減らすスピードを遅くするというだと思う。ただし、遅くしたとしても、最低何万人をずっと維持しなければならないというところまで考えていかないと、そのためにどうするか、それは私が考える長期の視点であるが、そうしないと桐生市のまちが、結局成り立たなくなる。 人の話で、日本のとある島では、人口が 3,000 人であるが、すごく裕福な生活をしているという話が出るが、果たして桐生はそうなるかというと、ならないと思うし、そうした中で、皆さんがやっているような一人ひとり個々が頑張って、そういう集合するものができて、それが一つの魅力になって人が来るということだと思うが、来るのもそうだが、出ないのもそうだし、ずっといてもらって生活してもらうという方向にしてもらっていかなればならないと思っている。
委員	全体的な総合計画の中では、最低この人口ということで、それ以下にならないようにどうしようかと考えているところなので、色々な意味で、一つ一つの中でも、皆が定住できる仕組みが、年代によっても考え方が違ってくるとは思うし、まちに住んでいた人も、違う意味で桐生に魅力を感じてきた人の意見も違うので、そこのバランスも十分に考えなければならないと思う。
委員	先ほどの話にあったように、まちなかにヤオコーのようなショッピングモールができたとしても、私は専門店が大事だと思う。話が少しずれると思うが、私はよく休日に前橋の魚屋へ買い物に行くのだが、専門店はすごく大事だと思っていて、スーパーなどができても専門店がなくなるとは思っていなくて、そういう人

	もいるので、人が集まることによって専門店も経営していけるような、そういうまちが理想だと思う。
委員長	相生のヤオコーは、私は近くなので、寄らせてもらっているが、相生以外の結構遠くから車で来る人もいたり、逆に、みどり市にできたつるやに買物に行ったり、大きい店には大きい店の魅力があるが、まちなかには、専門店、八百屋、魚屋であったり、この雰囲気に合った店舗展開も、もしかしたら、外の人から見ると魅力であるのかなと思う。 やはり世代によって、若い人たちには、自然が豊かであることを魅力に感じてくれていた方には、ちょっとした不便が楽しいと思える人が来るかもしれないし、年を取って、できれば身近な所で全部済ませたいと感じる人もいるし、その両方があるまちというのも大事なのかもしれない。先ほど話があったバランスというところも大事であると思う。
委員	先ほどの店のことで、ヤオコーなどはいくつかあればよく、まちの真ん中にある必要があるかとなってくると、正直、今近くにあるヤオコーに行けばよいので、いい。 それよりもむしろ、私は、最近黒保根に仕事の関係で行くことが多いのだが、黒保根にはラーメン屋などそこでしかないものがあり、色々と行くたびに発見がある。私は、最近家庭の中で「ヒュッゲ」というデンマークの言葉を使っているのが、何か温かみがあるだとか、家族や友人とゆっくりした空間と時間を楽しく過ごすとか、それで自然を大切にするとか、ＳＤＧｓみたいなところにもつながってくる、そういうことなのかなと思う。手作りだとか、周りの環境をすごく大切して感謝しているのとかをすごく感じて、そういうものを皆で共通の認識を持って、「こういうのは素晴らしいよね」とすごくアピールできる所、黒保根は。特に黒保根学園なんて、ああいうのができてくるとイメージとしてすごく使えるなと。 それは、桐生の人たちにそういう所の良さを本当に知ってもらって、それで桐生のまち自体も実はそういう「ヒュッゲ」みたいな感覚をすごく持っていて、手作りのものだとか、大切にするだとか、そういう何か、全体的なイメージを創っていく、それに合わせてまちをデザインしていくみたいな感じができてくると、外の人たちからも分かりやすい。 必ずしも、こういう人口には、こういう設備がなければならないという発想よりは、もっとすごく身近なものを大切にしていく感覚を大切にしていきたいなと。そういうことでどんどん情報を発信していく方がこれからは、若い人たちにもウケるのではないか。あまり背伸びしたりするのではなくて、無理しないで、やれる範囲の中で、できるだけ自分たちでやっていって、あるいは助け合ったりとかしていく感覚は、大切にしていくのもいいのではないかという気はする。 最近黒保根とか行きだしたら、すごく桐生いいな、楽しいなと改めて思った。
委員	昔は本当に、黒保根の生活というのは、まだそういうところが残っている。自分たちのことは自分たちでやるというのが。その辺の部分というのは、「ゆっく

	りズムのまち」にも、もしかしてなるかなと。
委員	「ゆっくりズムのまち」というのは本当にそれと合う感じで、そういうのを大切にしていくのは忘れない方がいいという気がする。
委員長	もしかしたら、「ゆっくりズムのまち」で、今公共交通のそういうところも、もっと拡充していって、公共交通を使おうといった意識がもっと高まったときに、色々な所に住んでいても、スーパーに行きたい人はスーパーにアクセスできるし、まちなかにはまちなかで、専門店のおじちゃんおばちゃんと話をしながら、「鮮度が良いものが今日入ったよ」なんて話をしながら、買い物ができる場所があってというような、そういうところを含めての感じになるのかなとは思う。 しかし、実際に暮らしている方が、不便を感じてしまうのは良くないと思うので、その辺りを上手くするにはどうしたらいいか。
委員	やはり、旧桐生市の人たちは、サービスが当たり前だったから、結構不便はすごく感じる。黒保根地区の郡部の人たちは、不便が当たり前ということだから、自分たちでできることをというのは、すごく感じる。公共交通といっても、なかなか走っていても乗らないし、それを便利に使えば本当にいいと思うが、家の前まで来ないと乗らないみたいな感じがある。
委員長	そこの価値観がちょっと。お店の目の前で車停めないと、という。
委員	しかし、あれだけ走っている。あれだけ走っていてそれを有効活用してもらえるような何かがあると、交通の便はきちんと時間の計画を立てて、自分で乗れば、使えるのではないかなと思う。なかなかそこの部分が、走っているものを有効的にまだ使えていない。
委員長	そこは何か行政が負う部分というよりも、私たちの意識や価値観だと思う。
委員	市民の意識。そこのところをまずは使ってみようと、自分がどういうふうに動けるかなというのを試してみるというのも、もったいない使い方では仕方ないから、その意識を変えるのが一番難しいところではある。
委員	大切なことだと思う。
委員	私が出した意見と、今出た意見は正反対だと思う。一番初めにあったように、お母さんが証明書を取りに行くことも大変な状況の中で、仕事を終わって買物をして家に帰り、明日の弁当を作ると、ではその専門店を一軒一軒回って買うのと、全てではないがそういう核となるものがあって、そこで間に合うとすれば、それは生活する上で必要なものだと思う。なので、それだけではないということである。 どちらが良いかというよりも、住み方も違うし、子どもを育てたりする、年齢

	も状況も違う。しかし、まちとして色々な人がいて、歩いて買物しか行けないお年寄りもいる。どちらがいいか分からないが、どちらも網羅できるような、そういうまちづくりをしていかなければいけないし、どちらかに偏るのもいけないかもしれない。
事務局 （企画課長）	今出た公共交通の話もそうであるが、結局、この議論はまちづくり全体のグランドデザインにも関わってくるので、今ここで、人口減少に有効的な対策の一点突破というところをこれから考えてもらうのであるが、この議論を深めても形になりそうもない。
委員長	長期の視野でまず考えてくださいという分野なのかとは思うが、すごく大事なことなので。
事務局 （企画課長）	一旦、ペンディングにして、ほかのテーマに移った後で、またここの分野で議論していただくのはどうか。
委員長	それでよろしいか。 （一同同意） キリがよく「2　住宅に関する意見」まで進み、「3　情報発信に関する意見」も話をした。次回は、振返りみたいな部分で、色々と情報を持って来てくれるとのことである。本日皆様から出た意見は、この後、事務局で整理していただき、次回更に深堀りしていく。意見を絞りたかったのであるが、その時間はなかったので、追々やっていく。 本日の議事が終わったので、議長の任を解かせていただき、司会を事務局に戻す。

４　その他

・事務局から、次回の開催日程について事務連絡。

５　閉　会　［ 終了：午後３時３０分 ］